

神の知について

- [第一項 知は神に適合するか。
- 第二項 神は自己自身を認識するか。
- 第三項 神は自分以外のものを認識するか。
- 第四項 神は事物について確実に確定した認識をもつか。
- 第五項 神は個別的なものを認識するか。
- 第六項 人間知性は個別的なものを認識するか。
- 第七項 神は個別的なものがいまあり、いまないことを認識するか。
- 第八項 神は非有を認識するか。
- 第九項 神は無限を知るか。
- 第一〇項 神は無限をつくることができるか。
- 第一一項 神についてとわれわれについてと、知は同音異義に言われるか。
- 第一二項 神は未来の偶然的なことを知るか。
- 第一三項 神の知は変わりうるか。
- 第一四項 神の知は事物の原因か。
- 第一五項 神は悪を知るか。]

第一項 問題は神の知についてである。

[異論一] 第一に、神の内に知があるかが問われる。ないと思われる。他のものに付加されているものは、もっとも単純なものには見いだされ得ない。ところが神はもっとも単純なものである。知は存在に対して付加されたものである。なぜなら生きることは存在に付加されることであり、知ることは生きることに付加されることだからである。それゆえ、知は神の内にはないと思われる。

[異論二] しかし、神における知は、存在に付け加えることはなく、知という名によって、存在という名によって示されているのは別の完全性が示されている、といわれた。しかしそれを反駁して、完全性というのは事物の名である。ところで、完全に一つの事物が神においては知であり存在である。それゆえ、知という名と存在という名によって同じ完全性が示されている。

【異論三】 さらに、いかなる名も、それが神の完全性の全体を表示しているのだから、神についていわれえない。というのは、全体を表示していなければ、神の何かを表示しているのではないからである。というのも、神には部分は見いだされないからである。ところが、知という名は神の完全性の全体を表示していない。なぜなら、『原因論』にいわれるように、神は「神に与えられるあらゆる名を超えている」からである。それゆえ、知を神に帰することはできない。

【異論四】 さらに知は結論の所有であり、知性は原理の所有である。これは、哲学者により『倫理学』第六巻で明らかである。ところで神は何かを結論として知ることではない。そうでなければ、神の知性は原理から結論まで推論することになるからである。そのようなことをディオニュシオスは天使たちからも取り除いている。『神名論』第七章。それゆえ神においては知は存在しない。

【異論五】 さらに、知られるものはすべて、何か、より知られているものを通して知られる。ところが神にとっては、より知られているものも、より知られていないものもない。それゆえ、神において知はありえない。

【異論六】 さらに、アルガゼルは、知は知るものの知性においてある、知られうる型どりであるという。ところが、型どりはいっさい神からは取り除かれる。それは受容を含意するとともに、合成を含意するからである。それゆえ神に知を帰することはできない。

【異論七】 さらに、不完全性の意味を含むことは、神に帰属させることができない。ところが知は不完全性を表す。なぜなら、所有態あるいは第一現実態が表示され、第二現実態としても考えられるからである。これは『デ・アニマ』第二巻で言われていることである。ところが、第一現実態は第二現実態に比べるなら不完全である。なぜなら、第二現実態に比べれば可能態にあるからである。それゆえ、知は神において見いだされえない。

【異論八】 ところで、神において知は現実態においてしかありえないといわれた。しかし、これに反対である。神の知は事物の原因である。ところが知は、もし神に帰属させられるとすれば、永遠から神のうちにあった。それゆえもし知が、神においては現実態としてしかなかったなら、永遠から事物を存在につくり出していたことになる。しかしこれは偽である。

【異論九】 さらに、何であれ、われわれが知という名を聞き知性において概念化したことに対応する何かがある、そこにおいて見いだされるようなものは、それについてわれわれが「あること」だけでなく、「何であるか」も知っているものである。というのも知は何かだからである。ところがわれわれは神について、「何であるか」を知らない。「あること」を知るだけである。これはダマスケヌスが知っていることである。それゆえ、知という名が表現している知性の概念には、神における何ものも対応していない。それゆえ神において知はない。

【異論一〇】 さらに、アウグスティヌスは、「すべての形相を免れている神は、知性にとって近づきえない」という。ところが知は、知性が抱くところの一種の形相である。それゆえ、この形相を神は免れている。それゆえ、神においては知は存在しない。

【異論一一】 さらに、知性認識は知より単純であり価値がある。ところが、『原因論』に述べられているように、われわれが神を知性認識するものと呼び、あるいは知性認識と呼ぶとき、神を本来の名で呼んでいるのではなく、原因された第一のものの名によって呼んでいる。それゆえ、まして、知という名が神に適合することはありえない。

【異論一二】 さらに、質は量より、大きな合成をもたらす。というのも質は量を介してしか実体に帰属しないからである。ところが神には、その単純性のゆえに、量の類に属するいかなることもわれわれは帰属させない。すなわち、部分をもつかぎりのことは帰属させない。それゆえ、知は質の類に属するのであるから、いかなる仕方でも神に帰属させられない。

【反対異論一】 『ロマ書』十一章で、「ああ、神の知恵と知識の蓄えのなんと深いことか。云々」と言われている。

【反対異論二】 さらに、アンセルムス『モノロギオン』によれば、「端的にすべてのものにとって、存在しないより存在するほうがより善いことは、神に帰属させるべきである。」

【反対異論三】 知には、認識者が事物について判断する「能動的な力」*potentia activa*と、認識された事物と、両者の一致の三者以外に必要なものはない。ところが神には至高の能動的な力があり、かつ、その本性は最も認識可能なものであり、結果、そこには両者の一致がある。それゆえ、神は最高度に知るものである。小前提の証明。『認識者について』

で言われるように、「第一の実体は光 lux である」。ところが、光は最大の能動的力 virtus をもっている。このことは、光は自身を拡散させ diffundo 多様化することから明らかである。また光は、そこから他のものも明らかにする、最大に認識可能なものである。それゆえ、神であるところの第一実体は、認識のための能動的な力を持ち、かつ、認識可能なものでもある。

【主文】 次のようにいわなければならない。すべてのひとが神に知を帰属させている。しかし、その帰属させる仕方は異なっている。あるひとびとは自らの知性によって、つくられた知のあり方を超えることができず、神において知は、われわれにおいてと同じように、その本質に付け加えられた状態のようなものと考えた。これは完全な誤りであり、不合理である。もしそうだとすると、神は最高に単純ではないことになる。神において実体と付帯性との複合があることになるからである。そしてまた神は自らの存在ではないことになるからである。というのは、ポエティウスが『デ・ヘブドマディブス』でいうように、存在しているものは何かを分有することがありうるが、存在そのものはけっして何も分有することがないからである。それゆえもし神が知を、付け加えられた状態のようなものとして分有しているとすれば、神は自らの存在ではないことになり、自分にとって存在の原因である他のものから存在をもっていることになる。このようにして神ではないことになる。

だから別のひとびとは、われわれは神に知を帰属させることにより、あるいは他の同じようなことを帰属させることによって、神のうちに何かを措定しているのではない、そうではなく、神は、つくられた事物における知の原因であることを表示しているのだと主張した。たとえば、神が知るものといわれるのは、被造物に知を注ぎ入れるからである、と。たしかに神は知の原因であるからという理由は、——オリゲネスやアウグスティヌスもそのように主張していると思われるが、——「神は知るものである」という命題の真理の何らかの根拠ではありうる。しかし、次の二点のゆえに、真理の全面的な根拠ではない。第一に、同じ根拠によって、神が事物において原因であることすべてが、神について述語されうることになる。たとえば、神は事物における動きの原因であるから動くといわれることになる。しかし、じっさいにはそのようにはいわれない。第二に、原因されたもの原因とについていわれることは、原因されたもののゆえに原因に内在するといわれるのではない。むしろ原因において見いだされるから、原因されたものに内在するのである。たとえば、火は熱いから空気に熱さを注ぎ入れるのであって、逆ではない。同じように、神は知的本性をもっているからわれわれに知を注ぎ入れるのであって逆ではない。

そこであるひとびとは、知やそれに類することが神に帰属させられるのは、関係の何ら

かの類似によるのであると主張した。たとえば怒りや憐れみなどの感情が神に帰属させられる場合と同じことである。神は、怒っているひとと似た結果をもたらすかぎりでは怒っているといわれる。というのも、神に怒りという感情はありえないが、神は罰し、これはわれわれの場合は怒りの結果だからである。これと同じような仕方では神は知っているといわれるのだと彼らはいふ。知っている者と似た結果を実現するからである。たとえば知っている者の働きは一定の原理から始まり、一定の目的に至る。神によって生ずる自然の働きも、『自然学』第二巻に明らかなように、これと同じような仕方では生ずる。しかしながら、この意見によれば、知は、怒りなどと同じように、転意的に神に帰されることになる。しかしこれはディオニュシオスや他の聖人たちのことばに反する。

したがってこれとは別の仕方では次のように主張しなければならない。神に帰属させられる知は、神においてある、何かを表示しており、これは生や存在などと同じことである。そしてこれらは表示された事物に関して異なっているのではなく、知性認識の仕方に関してだけ異なっている。同じ事物が神において存在であり生であり知であり、その他神について語られるこれに類することだからである。ところがわれわれの知性は神において、生、知、そしてこれに類することを知性認識するにあたり、異なった観念をもっている。

しかしながらこれらの観念が偽であるということではできない。われわれの知性における観念は、一種の類似化によって、知性認識された事物を再現しているとき、真である。もしそうではなく、事物において元になるものが何もないならば偽であったはずである。しかし、われわれの知性は被造物を再現しているような仕方では類似化によって神を再現することはできない。というのは、何らかの被造物を知性認識するときは、事物の完全性全体について事物の類似である形相を概念として捉え、このようにして知性認識された事物を定義する。しかし神はわれわれの知性を無限に超えているから、われわれの知性によって概念化された形相は神の本質を完全に再現することができず、何らかのわずかな模倣をもつにとどまる。魂の外に存在する事物において、どのような事物も何らかの仕方では神を模倣しているが、その仕方は不完全であり、したがって異なった事物が異なった仕方では神を模倣し、異なった形相によって、神のひとつの単純な形相を表出しているからである。なぜなら、神の形相においては、被造物において区別され多数化されて見いだされる完全性も、すべてが完全にひとつである。ちょうど数のすべての固有性が、ある意味で、一において先在するように、また、王国において臣下の権限は王の権限においてひとつであるように。しかしもし神を完全に表出する事物があったとすれば、それはただひとつしかなかったであろう。なぜなら、それはひとつの仕方ではひとつの形相によって表出したであろうから。したがって、父の完全な似像である子はひとつしかないのである。同様にわれわれの知性はさまざまな概念によって神の完全性を表出するが、それはひとつひとつの概念が不完

全だからである。もし完全であったなら、ただひとつの概念しかなかったであろう。神の知性にただひとつのことばしかないのと同じように。それゆえ、われわれの知性には神の本質を表出する複数の概念があり、神の本質はそれらひとつひとつに、事物がその不完全な像に対応するような仕方に対応し、それら知性の概念のひとつひとつは、ひとつの事物についての複数の概念ではあるが、真である。そして、『命題論』第一巻でいわれているように、名は、知性を媒介としてしか、事物を表示しないから、知性は知性認識のさまざまな仕方に応じて、あるいは同じことであるが、さまざまな観点（ラチオ）に応じて、複数の名をひとつの事物に定めるのである。しかし、これらすべての名には事物における何かに対応している。

【異論回答一】 知が存在者への添加によって生じるのは、知性があるものの知と存在とを区別して捉えているかぎりである。なぜなら、添加は、区別を前提しているからである。そして、以上で言われたことから明らかなように、知性認識する仕方によらなければ、神に知と存在は区別されないから、神における知も、知性認識する仕方によらなければ、存在への添加によるものとはならない。

【異論回答二】 神における知が、存在とは別の完全性を表示している、と真の意味で言うことはできない。むしろ、知は、別の完全性によるという仕方に表示されているのである。われわれの知性は、神についてもっているさまざまな異なった概念により、前述のさまざまな名前を定めているからである。

【異論回答三】 名前は観念のしるしである。観念は知性認識においてあるあり方にしたがって事物の全体を表示するものとなる。ところが、われわれの知性は神の全体を知性認識することが可能であるが、全面的には認識できない。神について、全体が認識されるというのは、神のうちには部分も全体もないから、神について認識されるのは、全体か無かのいずれかであることは必然だからである。しかし、われわれの知性は、神について全面的な認識はできない、とわたしが主張するのは、認識可能な本性においてあるかぎりでの神を、われわれの知性は完全に認識することはないからである。ちょうど「(長方形の)対角線は辺と通約できない」という結論を蓋然的に、すなわち、すべての人によってそのように言われているからという理由で、認識している人は、その結論を全面的には知らない。その結論のいかなる部分も知らないわけではないけれども、それによりこの結論が認識可能であるところの仕方を完全に認識するには至っていないからである。同じように、神について言われる名前も神の全体を表示しているが全面的に表示しているのではない。

【異論回答四】 神においていかなる不完全性もともなうことなくあることが、被造物においては欠陥をともなって見いだされるのであるから、被造物のうちに見いだされたことを神に帰属させるのであれば、われわれは、不完全性に属することの全体を分離し、完全性に属することのみが残るようにしなければならない。というのも、ただこのような仕方でのみ、被造物は神をまねているからである。われわれにおいて見いだされる知は、ある種の完全性と不完全性とをもっているとわたしは言う。知の完全性にかかわるのは、知の確実性 *certitudo* である。というのも、知られるものは確実な仕方認識されているからである。他方、知の不完全性に属するのは、原理から結論へ知性が進める推論であり、知はこのような結論について成立する。ところが推論は、知性が原理を認識するとき、ただ可能性においてしか結論を認識していないから成立するのである。もしそのとき、現実に結論を認識していたならば、推論はなかったであろう。というのも、運動 *motus* は可能態から現実態への移行 *exitus* に他ならないからである。したがって、認識された事物に関する確実性の概念にしたがうなら、神における知が語られるが、先に述べられた推論という概念にしたがうなら、神における知は語られない。こうした推論は、ディオニュシオスが述べているように、天使にも見いだされない。

【異論回答五】 神は、同一の直観によりすべてを見ているのであるから、認識者の様態を考えるなら、神により何かはより多く知られていたり、より少なく知られていたりすることはない。しかし、認識された事物の様態を考えれば、あるものをそれ自体としてより多く認識可能であると認識し、また、あるものはそれ自体としてより少なく認識可能であると認識している。そして、それによってすべてが認識されている神の本質はすべての中でもっとも認識可能なのである。もちろん、神はその本質を見ることで同時にすべてを見ているのだから、何らかの推論によって認識可能なのではない。したがって、認識されるものの側から、神の認識において見て取られる秩序についても、神のうち知の概念 *ratio* は保持される。というのも、神は原因によりすべてを、優れた仕方認識するからである。

【異論回答六】 アルガザーリーのことは、われわれの知について理解されるべきである。知がわれわれによって獲得されるのは、事物がその類似をわれわれの魂へと刻印するためである。他方、神の認識の場合、その逆である。というのも、もろもろの形相は、神の知性からあらゆる被造物へと流れ出る *effluere* からである。よって、われわれのうちにある知はわれわれの魂のうちにある事物の刻印であるように、事物の形相は、その逆に、事物のうちにある神の知の何らかの刻印に他ならないのである。

【異論回答七】 神のうちにおかれている知は、所有態においてあるのではなく、むしろ、現実態においてある。というのも、神は常にすべてを現実認識しているからである。

【異論回答八】 能動因から結果が生じるが、それは能動因の制約にしたがって以外の仕方ではない。したがって、何らかの知によって生じた結果はすべて、その制約を決定している知の限定にしたがう。したがって、神の知を原因とする事物は、その生じることが神により限定される時にしか生じない。だから、神の知は永遠から現実態にあったが、事物が永遠からなければならないことにはならない。

【異論回答九】 知性が、あるものについて「何であるか」を知っているとされるのは、知性がそれを定義する時である。すなわち、当の事物にすべての点で対応する形相を知性が捉えるときである。ところで、先に述べたことから、われわれの知性が神について概念として捉えたことは何であれ、神を表出するには不十分であることは明らかである。したがって、神の「何であるか」は、われわれには常に隠されたままである。したがって、神は、神についてわれわれが認識することのすべてを超えているという認識が、われわれが現世においてもつことのできる最高の認識である。このことは、ディオニュシオスの『神秘神学』第一章により明らかである。

【異論回答一〇】 神は「われわれの知性のあらゆる形相を逃れている」とされるのは、われわれの知性の形相は何であれ、いかなる仕方でも神を表出することはないからではない。いかなる形相も神を完全には表出していないからである。

【異論回答一一】 『形而上学』第四巻で言われているように、「名の表示している概念 ratio が定義である」。そしてここから、その表示していることが事物の定義であるような名が、その事物の本来の名なのである。そして、すでに言われたように、名によって表示されているいかなる概念も、神を定義することはないから、われわれによって置かれたいかなる名も神に固有な名ではなく、名によって表示された概念により定義されている被造物に固有な名なのである。しかしながら、このような、被造物に属する名が神に貴族させられるのは、被造物において神との類似が何らかの程度に表出されていることによる。

【異論回答一二】 神に帰属させられる知は質ではない。しかもそして、量に付加される質は物的な質であって、知のような霊的質ではない。